



平成9年入所時

十三まいり

弁護士 草地 邦晴



子どもが13歳になるので、この春、子どもとともに法輪寺に十三まいりに行った。京都育ちではない私自身はその経験がなく、京都に住むようになって初めてこうした参詣を行うことを知った。

京都では、子どもが13歳になる年に、嵐山の法輪寺に参詣し、ご祈祷を受けて知恵を授かる十三まいりの風習がある。法輪寺のホームページを見ると、「古来より、数え年十三歳に成長した男女が、成人の儀礼として法輪寺に参拝しました。十三歳の厄難を払い、智恵を授けていただけるように虚空蔵菩薩に祈願します。」とある。古くは、数え年で13歳の年に、旧暦の3月13日に参詣するものであったようだが、今では少し幅を持たせて、数え年で、あるいは満年齢で13歳の子どもが新暦の4月13日の前後1ヶ月の間に参詣するようになってきているらしい。女子はこれにあわせて本裁の大人の着物を作り、肩上げて着ることも多い。

一般に子どもの成長を祝う行事としては七五三の方が有名で、今では全国的に広く行われているが、京都ではむしろ十三まいりの方が大事なものとされている印象を受ける。七五三の由来には諸説あるようだが、行事として広く行われるようになったのは江戸時代の武家社会で、関東地方で定着し次第に広まったとされているようなので、そのためかもしれない。京都で十三まいりが広く行われるようになったのは江戸中期のことで、主に京都や大阪を中心に上方で広まったそう。現在でも京都だけではなく、関西を中心とした虚空蔵菩薩が祀られるお寺では十三まいりが行われているそうだが、これほど当たり前の行事として行われているのはおそらく京都だけではないだろうか。

虚空蔵菩薩は知恵の菩薩様で、参詣した子ども達はご祈祷を受け、厄を払い、知恵を授けて頂いて帰る。ここで興味深いのは、十三まいりでは渡月橋を渡り終える迄は決して振り返ってはいけない、と言い伝えられていることだ。振り返ると、せっかく授けて頂いた知恵を失ってしまうのだそう。私の子どもも妻から渡月橋を渡り終わるまで振り返ってはいけないと厳しく言い渡されており、法輪寺からの帰り道は、同じように諭されたであろう子ども達のどこか緊張した面持ちが連なり、なんだかほほえましく映る。

なぜ、振り返ると授かった知恵を失うのか、なぜ渡月

橋を渡り終えるまでなのか、その理由をはっきりしない。インターネットで調べてみても、振り返ってはいけないことは念を押されているが、理由には定説はないようだ。

決して振り返ってはいけないよ、と送り出される場面といえば、宮崎駿監督の千と千尋の神隠しで、千尋が湯屋から元の世界に戻ってくる時にハクがかけた言葉を思い出す。旧約聖書ではロトの妻が神から振り返ってはいけないと言われたのを破り塩の柱になったとされているし、ギリシャ神話ではオルフェウスは、地上につくまで振り返ってはならないとの王の言を破ったために、妻は再び死者の国に戻されてしまう。よく似たモチーフは、異なる世界から現世に至る手前で振り返ることが禁じられ、これに背くと得たものを失うということを示すのだろうか？

日本の昔話では、鶴の恩返し、浦島太郎、舌切り雀など、決して見てはいけない、開けてはいけない、と言われたのに、誘惑に負けて背き、ひどい目に遭うというお話が多くある。言いつけに背いてはならない、タブーに触れてはならない、そうしたことを子ども達に伝えようとしているとも言える。そうすると、十三まいりに来て知恵を授かった子ども達に、誘惑に負けず、守るべきルールは守らなければならないという、大人社会で守るべき、もう一つの教えを授けようとしたものと見ることもできるかもしれない。

いや、もしかしたら、もっとシンプルに、成人の儀礼をすませた大人として、後ろ（子ども時代）を振り返ってはいけないということ象徴しているのか、あるいは、もう大人になったのだから、いつまでもちよろちよろしたり、騒いだりしたらあかん、という教えが集約された表現なのか……。

真の理由はよく分からないままであるが（ご存知の方がおられたら是非教えて下さい。）、そのこと自体はどうでもいいことではある。いずれにしても、前を向いて、大人の晴れ着を着て、緊張した顔でまっすぐ歩いて行く子ども達の姿は気持ちの良いものである。子ども達の成長を祝い、知恵を持った大人として更なる成長を願う家族の気持ちも、時代を超えて大切にしてほしいものである。そうした通過儀礼として存在するからこそ、京都で続いている風習なのだろうと思う。